

同志社大学
2024 年度卒業論文

論題 日本マンドリン文化の社会史
—大衆文化の視点から—

社会学部社会学科

学籍番号：1109211024

氏名：片山 桜朗

指導教員：立木 茂雄

(本文の総字数：20033 字)

要旨

論題 日本マンドリン文化の社会史

—大衆文化の視点から—

学籍番号：1109211024

氏名：片山桜朗

本稿は、日本におけるマンドリンの辿ってきた歴史について再考し、先行研究をもとに「大衆文化」の視点から論ずる。細川（2020）の近代日本の音楽史論におけるマンドリンに関する論である「マンドリンは洋行帰りのエリートによってまず同好会が組織され、雑誌を通して都市学生、青年の間でサークルが網の目のように広がり、彼らの強いリーダーシップの下、大震災前に全国大会を持った。」という記載を先行研究にとり、細川の調査範囲より広い範囲の歴史調査、及び20歳から24歳までの若者の大学進学率を研究に含め、「マンドリンは戦前までエリート大学生の限られた文化だったものが、戦後若者及び大学生の急増により1970年ごろ大衆化した」という、細川の論とは異なった命題を検証する。調査の結果、上記の命題は立証され、若者を取り巻く社会情勢、法律及び若者の大学進学率がマンドリン文化の発展に密接に影響を与えていることを説明することが出来た。

[キーワード] 大衆文化、大学進学率、エリート大学生

目次

1	序論	1
2	先行研究と分析方法	2
2.1	先行研究	2
2.2	分析方法	2
3	中心命題の立証	4
3.1	1905~1923	4
3.2	1923~第二次世界大戦期	10
3.3	戦後~1970年代	17
4	考察	22
5	参考文献	24
6	付録（年表）	26

1 序論

日本国内にマンドリン演奏人口は約3万人、過去にクラブなどで弾いていた人も含めると、約20万人もの数が存在するという(工藤,2016)。世界中を見渡してもこれほどまでの数を誇る国はなく、マンドリン奏者・研究家の吉田剛士の言葉を借りるなら「日本はマンドリン大国」なのである(吉田,2022)。しかし、世間一般的な認知度から考えると、オーケストラや吹奏楽と比べると、決して文化として根付いているとは言えない。筆者自身、高校時代に他校の友達とバスで鉢合わせした際、その子が偶然にもマンドリン部に所属しており、そこで「マンドリン」という楽器の存在を始めて知った。マンドリンについて知る、触れる機会はさほど多くないという現状がある。また、マンドリンはクラシック音楽・ポピュラー音楽と様々な形態で演奏され、また特にマンドリン黎明期から日本のマンドリン界の中核をなしている「マンドリンオーケストラ」においては、当初はクラシック音楽の演奏が基本だったものの、昨今ではより音楽的なジャンル分けが難しくなっている。今や一概にマンドリンをクラシック音楽の枠に当てはめる事はできず、「マンドリン音楽とはどのような音楽でどのような文化か」と尋ねられれば返答に困ってしまうだろう。

学術的な面からマンドリンを論じた論文は圧倒的に少なく、先述のようにマンドリン音楽のジャンルも現在は多様化しているため、クラシック音楽や吹奏楽を題材にして論じられている論文をマンドリンにそのまま当てはめることはできない。しかし近年、近代日本の音楽について様々なジャンルを網羅しつつ体系的に論じた細川修平の研究において、「マンドリンは洋行帰りのエリートによってまず同好会が組織され、雑誌を通して都市学生、青年の間でサークルが網の目のように広がり、彼らの強いリーダーシップの下、大震災前に全国大会を持った。」といった、マンドリンに関する記載がなされた(細川 2020)。マンドリンが比留間賢八によって日本に持ち込まれた1901年から、1923年の関東大震災までの文化の興隆を端的に表現している。

ところが、一目でわかる通り細川の論は論じている時代の範囲が非常に狭い。まるで、関東大震災によって文化が終わったようにも読み取れる。また、実際に細川の研究の中でこのマンドリンの叙述に関する具体的な調査データは出ていない。つまり、限られた狭い範囲の中で、少ない調査量でこのマンドリンに関する記載がなされているのは明白であり、「マンドリン文化を正確に記している」、ひいては「マンドリンに関しての研究の発展に貢献する」とは言い切れないのである。

そこで本論文では、この細川の記載を発展・深化させる形で、マンドリン文化の興隆に

ついて歴史的資料を基に分析してゆく。とくに本論文では、「日本の近代音楽史において、日露戦争と関東大震災にはさまれた約 20 年間は、官主導でこれまで行われてきた洋楽の導入が民主導で動き出した時期にあたる。」(細川 2020,1-2) といった、「大衆文化」の視点を用いた細川の論の主題に沿う形で、日本社会の近代化及び人口動態や当時の文化の担い手であった大学生の学生数などとの相関を調べる。マンドリンの略史という形では工藤哲郎の調査が挙げられるが(工藤 2018)、本論文は工藤の研究も適宜参照しつつ新たな視点を加えた論文となるであろう。

改めて言えば、本論文の命題は細川の命題とは異なる。細川は先述の通りマンドリンに関して「マンドリンは大正時代に花開き、震災まで大衆化した」と論じており、以後は特にマンドリンには触れていない。このマンドリンに関する記載自体は先述の細川の主題、つまり日本の近代音楽史の考察の一環として取り上げられている。しかし本論文は「マンドリンは戦前までエリート大学生の限られた文化だったが、戦後若者及び大学生の急増により 1970 年ごろ大衆化した」という命題を立て、検証する。そのため、細川の調査範囲である大正時代以降のマンドリン文化も調査し、さらに 20~24 歳までの若者の人口動態・大学生の数といったデータを分析に含めることとする。

第一章以降の本文の構成は以下のようなになる。まず、第二章にて先行研究として細川(2020)の研究と、工藤(2014)の研究の成果を紹介する。特に細川の研究は本論文の命題を構成する上では核となるものである故に、先述のマンドリンに関する論を含めた、細川の近代日本の音楽史論の概要を記載する。その後調査形態の説明、及び調査に用いた文献を紹介する。第三章は、中心命題の立証について調査結果をもとに行う。細川の調査範囲である 1901 年から 1923 年までが範囲の第一節、1924 年から第二次世界大戦期までの第二節、大戦後から 1970 年代までの第三節と、三節立ての形式をとる。第四章では結果及び考察を、細川の記載に沿う形でまとめる。その後今後の研究の展望について触れ、本論文の結びとする。

2 先行研究と調査方法

2.1 先行研究

本論文では先行研究として細川(2020)の研究を取り上げる。細川の記した近代日本の音楽史論全体を概観すると、まず 1905 年の日比谷公園野外音楽堂完成を取り上げ、近代日本の音楽史における重要な転換点だとしている(細川 2020,1)。ここで日本初の市民向け軍楽隊奏楽が行われたのだが、これは 1904 年の日露戦争勝利の流れのもとにあることは容

易に想像できる。戦争勝利後の高揚感のもと、約 10 年後には大正時代という新しい時代を迎え、その間の政治的運動は「大正デモクラシー」と呼ばれた。細川は上記の軍楽隊奏楽を吹奏楽日常化の象徴、つまり「デモクラシー」の始まりと指摘している。この「デモクラシー」の意味するところについて、細川は、「民主導」「土着化・日本化」「下から上へ底辺層から社会や文化が創り出されている感覚」と述べている(細川 2020,2-3)。先述の「大正デモクラシー」の意味するところとはまた違ったものであることに留意されたい。またこの年には東京朝日新聞による初めての洋楽会回顧が行われ「洋楽の可聴化」も起こったと指摘されている(細川 2020,1)。終わりの 1923 年に起こった関東大震災においては、この年以降徐々に電気録音・ラジオ・トーキー・外国資本のレコード会社・ジャズ・レビュー・ダンスホールが連鎖的に現れ、1930 年の帝都復興祭で、今まで西洋の模倣という形を免れなかった洋楽が日本固有のありようで軌道にのったと指摘されている(細川 2020,2)。つまり、震災が何かを引き起こしたというよりも偶然にも 20 世紀の音楽激変期と重なったというわけである。この 1905 年から 1923 年までを「デモクラシー期」とし、このデモクラシー期において、「都市中間層が消費生活を享受する基盤が生まれた」と細川は指摘している(細川 2020,3)。

もう一つの重要な先行研究として工藤(2014)を取り上げる。工藤所属の日本マンドリン連盟の機関誌『JMU ジャーナル』に連載されていた「マンドリン略史」が JMU ホームページにて公開されているのを発見し、本研究に取り入れる事とした。工藤の研究はバロック時代のマンドリンの起源から 2014 年までを対象としたマンドリンの体系的な略史であり、本研究においても大いに参考になった。現代にほど近い 2014 年までを対象とした日本のマンドリン界における通史は、工藤を除いては他にない。本論文はある意味ではこの工藤の研究の上に細川の論の検証と大学進学率などの変数を加えたものだとも言えるだろう。

2.2 分析方法

分析手法としては、基本的には資料分析という形をとる。マンドリンの歴史は、当時代の重要な担い手である比留間賢八・菅原明朗・中野二郎・武井守成の 4 人の人物史を Excel を用いて年表にし、それらを並列させることで表している。年表という形をとることにより、文化の興隆地点、チェックポイントを見つけやすくするねらいがある。また先述のように時代背景、大学生の人口動態も並列させ、これらとマンドリン文化との関わりを探る。分析に用いた資料として、比留間に関しては飯島國男著『比留間賢八の生涯—明治西洋音楽揺籃時代の隠れたる先駆者』と工藤(2014)を、菅原に関しては松下鈞編著『マエ

ストロの肖像－菅原明朗評論集』と、本研究にあたってオザキ譜庫様からご提供いただいた資料を、中野に関しては工藤哲郎著『中野二郎とマンドリン』を、武井に関しては工藤（2014）と ARMONIA（1959）を主に用いる。またこれら四人とは別に、マンドリン史において重要な出来事を記した行も作成する。この行に関しては先述の工藤の研究や各人物史に用いた資料のみならず、大正時代当時に発行されていたマンドリン雑誌『マンドリンとギター』『マンドリン・ギター研究』のような1次資料も用い、内容の説得力を増大させるねらいの他に、当時の文化の担い手の空気感を研究に加えるねらいもある。戦争など世界・日本の情勢を記した行は『詳説日本史』を参考にした。そして20-24歳の人口動態は国勢調査を参考にし、1920年から1975年までを5か年ごとに記した。大学生徒数は『学制百年史 資料編』を参考にし、1918年から1971年までを5か年ごとに記した。この大学生徒数をその年に最も近い20-24歳の人口で割ることで、当時の20-24歳の大学進学率を計算した。

3 中心命題の立証

3.1 1901~1923

まず、第一節ではマンドリンが比留間賢八により日本にもたらされた1901年から関東大震災までを分析してゆく。すなわち細川の研究範囲とほとんど同じである。データとしては下の年表をご覧いただきたい。この年表の内容を中心としながら考察を行う。

表①の比留間の行を見ると、1901年に通訳として欧州各地を巡っていた比留間がマンドリンをはじめて日本に持ち帰り、翌々年の1903年には鈴木政吉（現在のスズキ弦楽器）と共に日本で初めてのマンドリンを制作した事が分かる（工藤 2014,1-2）。工藤曰く当時のマンドリンの価格は7円ほどで（工藤 2014,2）、約10年後の大学生の生活費の内訳が「食料6円、部屋は6畳に二人で一人1.5円、宿舍生費200銭、合計月8円」だったことを考えると（南北社,1913）、当時の大学生の相場からするともっと高く、いわゆるエリート趣味的価格だという事が読み取れる。次に1905年には日本初のマンドリン四重奏団が結成されるが（工藤 2014,3）、歴史の行に目を向けてみると、この1905年には日比谷公園野外音楽堂が完成していることが分かる。先述の通りこの出来事を細川は吹奏楽日常化の象徴、「デモクラシィ」の始まりと指摘しているが、この細川の音楽史感全体と比較すると、マンドリンは舶来して間もなく、ましてや日常化とは程遠い位置にあるため、まだ「デモクラシィ」の始まりとは言い切れないであろう。しかし、細川の論にある「マンドリンは洋行帰りのエリートによってまず同好会が組織され」という部分は、大方正しいと

言える。比留間はもともと宮内庁から命じられた「音楽取調掛」の伝習生として異国に渡っている「エリート学生」だからである。また帰国後に自宅でマンダリンの個人教授を始めるが、教え子は各界名士の令息、令嬢などがほとんどだったという（工藤 2014,1-2）。命題でも示したように、マンダリンは最初期は飛びぬけて「エリート学生」の文化だったのである。また、「同好会が組織され」という言及に関しては、先述のマンダリン四重奏団にとどまらず翌年の1906年には東京上野美術学校に日本初のマンダリン合奏団が組織されている（工藤 2014,3）。

表1

	1901	1902	1903	1904	1905	1906
歴史（文化・学生関係）					日比谷公園 野外音楽堂 完成 『東京朝 日』洋楽会 回顧	
比留間賢八	帰国 はじめてマンダリンを持ち帰る マンダリン講師になる はじめてマンダリン独奏を演奏	通訳を囑託される 慈善音楽会にて ヴァイオリンと合奏	鈴木政吉とともに 日本で最初のマンダリンを制作 独習用の『マンダリン教科書』を共益商社より発行		日本最初のマンダリン四重奏団を組織	東京上野美術学校に日本初のマンダリン合奏団を組織 「慶應義塾ワグネルソサイエティ」にて日本最初のマンダリン合奏の公開演奏を行う

次に細川の論の「雑誌を通して都市学生、青年の間でサークルが網の目のように広がり、彼らの強いリーダーシップの下、大震災前に全国大会を持った。」という部分に関しての検討を、表②を参照にしつつ行う。1908年に比留間が通信教授『マンダリン好楽会』を開始し、1910年には『マンダリン独習』を共益商社より発行している（工藤 2014,2）。次に学生のサークルについては、マンダリン略史の行に目を向けると1910年に慶應義塾・同志社にクラブが創設され、1913年に早稲田・平安女学院、1914年に明治大学に創設されている（工藤 2014,4-6）。またサークルの他に学校の学科として1913年に平安女学院、1914年に女子音楽学校、1915年に大阪音楽大学にマンダリン科が設置されている

(工藤 2014,4-6)。学外でのサークルについては、1915年に詩人萩原朔太郎により「ゴンドラ洋楽会」が創設、また同年日本初のプロマンドリニスト・慶應マンドリン倶楽部創設者である田中常彦の勧めにより武井守成がマンドリン合奏団を創設、1917年に東京YMCAマンドリン倶楽部が比留間を顧問に迎え創設されている(工藤 2014,1-4)。果たしてこれらのサークルの広がり雑誌を通してもたらされたのか、というのが争点であるが、これに関しては検討する点が2つある。一つ目は比留間、田中常彦といった当時すでにプロとして活躍していた人物との直接的な関わりによって創設されたサークルが多い点である。これに当てはまるのは慶應、武井の合奏団であるシンフォニア・マンドリニ・オーケストラ、東京YMCA倶楽部である。これらの合奏団は彼らが直接創設に関わっている以上、少なくとも雑誌の影響が大きいとは言い難いであろう。二つ目はサークルのほとんどが東京に集約している点である。細川の指摘通り雑誌によってサークルが広がったのであれば、雑誌は全国で流通されるのであるから、これほどまでに東京一極集中にはならないであろう。先述の団体の中で活動地が東京でないサークルは同志社、ゴンドラ洋楽会ほどである。また後述するが、「全国マンドリン合奏コンコロソ」においては、全国と銘打ってはいるものの参加サークルの大半が東京のサークルである。よって、細川の論に関して、「都市学生、青年の間でサークルが網の目のように広がり」という点は非常に的を射ているものの、それが「雑誌を通して」起こったとは言い難いであろう。

表2

	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917
マンドリン略史				田中常彦を中心として慶應マンドリン倶楽部創設 同志社大学マンドリン倶楽部創設	慶應にA.サルコリが指導		早稲田大学にて、マンドリン合奏が行われる 京都の平安女子音楽学院にてマンドリン科を設置	明治大学マンドリンクラブ創設 女子音楽学校にマンドリン、ギター科が創設	萩原朔太郎「ゴンドラ洋楽会」を組織 大阪音楽学校にマンドリン・ギター科を設置		東京YMCAマンドリン倶楽部創立
比留間賢八	マンドリン音楽通信教授を計画 『通信教授用紙』『試験用紙』を執筆・出版	通信教授『マンドリン母楽会』開始 「コロスボンデンス・スクール」マンドリン科五十のレッスンを受講開始 後に修了		『マンドリン独習』を共益商社より発行				赤坂に移り住み、マンドリン教授に専念 「カチューシャの唄」をレコーディング	長女絹子(比留間きぬ子)誕生		
武井守成				東京外語伊語科第一学年を修了し、留学のためイタリアへ渡航 同年所要により帰朝		同校主催卒業この頃より自習でギター演奏・和声学を修得		田中常彦氏の訪問を受けマンドリン合奏を始める (ARMONIA.1954.30)	会名「シンフォニア・マンドリニ・オーケストラ」とする 機関紙「マンドリンとギター」発刊		宮内省式部官に任命される

次に表③を参照しつつ「彼らの強いリーダーシップの下、大震災前に全国大会を持った。」という論に関しての検討を行う。「彼ら」の意味するところは先述の通り比留間、田中、彼らに少し遅れて勢力を強めて来た武井、また菅原明朗のことを指すであろう。比留間、田中がプロマンドリニスト、またサークル顧問として尊敬、地位を得ていたのは言う

までもないが、こと武井に関しても、細川の記載にある「全国大会」を主宰した点で優れたリーダーシップを発揮していたであろう。この大会が、1923年に第一回、1924年に第二回を開いた、全国マンドリン合奏コンクール(以下コンクール)である。コンクールはマンドリン合奏の競技会であり、武井率いるシンフォニア・マンドリニ・オーケストラが主催した。第一回は同志社大学マンドリンクラブが優勝、第二回は同志社大学マンドリンクラブと音楽教育家斎藤英雄率いるオーケストル・エトワールの同率優勝という結果となった(工藤 2014,7-8)。リーダーシップを発揮した「彼ら」に挙げた菅原明朗に関しては、菅原の行を確認すると1922年に同志社大学マンドリンクラブの技術顧問に就任している(同志社大学マンドリンクラブ百年史編集委員会 2010,13)。菅原の指導の影響は非常に大きかったようで、『同志社大学マンドリンクラブ百年史』には菅原の指導に関して以下のような記載が残っている。「指導者として菅原氏を得、クラブの中心に忠やんを得たことは大正11年、12年(1922年、1923年)の全国コンクールに優勝した主な理由である。」(同志社大学マンドリンクラブ百年史編集委員会 2010,13)同志社大学マンドリンクラブのコンクール二連覇という快挙に大きく貢献し、以降のマンドリンにおける同志社の影響力を決定づけた点で、菅原もリーダーシップをいかんなく発揮していると言えるであろう。ここで、第一回コンクールの参加団体をまとめる。「東京帝国大学マンドリンクラブ」「アニマ・マンドリン・クラブ」「慶應義塾マンドリン倶楽部」「ソチエタ・マンドリニスティカ・ディ・ヨコハマ」「東京プレクトラム・ソサエティ」「オーケストル・エトワール」「同志社大学マンドリンクラブ」の7つである。先述の内容ではあるが、この中で東京及び首都圏でないクラブは同志社大学マンドリンクラブのみなのである。同志社が出場した経緯については、シンフォニア・マンドリニ・オーケストラに菅原が1918年に入団していることを考えれば(松下 1998,478)、当時の首都圏外の団体においては特殊なケースで出場が叶ったと考えられるだろう。また、参加こそしなかった団体が多かったものの開催準備のための茶話会において、公然照会をした団体は全27団体であるが、その中でも首都圏外のクラブは7つに留まっている(工藤 2014,7-8)。このことから、当時のマンドリン文化がいかに首都圏一極集中していたかが分かるであろう。細川の指摘にとどまらず、現代のマンドリン界でもコンクールは全国大会として理解されているものの、実際のところ当時はまだ全国にまでマンドリン文化は決して広がっていなかったのである。その点では細川の使う「都市学生」という文言は的を射ていると言ってもよいだろう。

表3

	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924
菅原明朗	4月 シンフォニアマンドリニオルケストラ (SMO) 入団。武井と出会う(松下,1998 478) 6月 「マンドリンとギター」誌に寄稿以降度々寄稿 秋 結婚	年間を通して「マンドリンとギター」誌に度々寄稿 3月 奈良に居を移す 11月に再度上京					
武井守成	SMOに菅原明朗が入団 同年の演奏会にて瀬戸内藤吉を指揮者に迎える(松下,1998 478)			「ギターの夕」を開く 宮内省楽部長を兼任	英国ボーン文庫の大半を譲受け武井文庫とする。 ギター曲「タルレガに捧ぐる曲」「野遊び」を出版	1月、第一回全国マンドリン合奏コンクールを実施 関東大震災により武井文庫と楽器が消失 総会を帝国ホテルで開き「オルケストラ・シンフォニカ・タケイ」と改める	機関誌を「マンドリン・ギター研究」と改名 OST第16回演奏会より大沼哲を迎える 単行本「マンドリン・ギター・及其オーケストラ」刊行 8月、第一回独奏曲コンクールを開催 11月、第二回コンクールを実施 カラーチェ氏来朝、OST主催演奏会を開く

次に 20~24 歳の人口動態、及び大学進学率の行を記した表④を見てゆく。先述のように大学サークルも当時から一定数は存在しており、加えて言えばコンクールにて首位を勝ち取ったのも大学サークルであった。また、比留間の教え子たちも令息令嬢、つまり当時は大学生の可能性が極めて高い人々であると考えられる。このことから、20~24 歳の「大学生」が当時は主な文化の担い手とみなし、調査の変数とすることに妥当性があると判断した。第一節ではデータが一つしかないためグラフ作成ではなく表でとどまった。第一回国勢調査が 1920 年、それに最も近い学生数調査が 1918 年のため、この表のような結果になった。見ると、大学進学率はわずか 0.20%にとどまっていることが分かる。当然この中でマンドリンサークルに所属している人口を考えると、それがごくわずかなのも明白である。この時期がそもそもマンドリン文化の芽生えの時期だったとはいえ、細川の指摘するような「デモクラシ」の波の中にマンドリンがあったとするには、その人口はあまりにも少ないであろう。細川は先述の通り、「デモクラシ期に都市中間層が消費生活を享受する基盤が生まれた」と指摘しているが、この時期はあくまでもマンドリンは 20~24 歳の人口の中でも極めて限られたエリート学生内での、小さな文化だったのである。

表4

	1918	1919	1920
20~24歳の人口動態			4609310
大学生数・大学進学率	9040		0.20%

ここで、第一節の内容を総括する。まず比留間が1901年にマンドリンを日本に伝来させ、1903年に初の国産マンドリンを制作するが、それは当時の大学生の生活費からすると極めて高価で、手が届かないような代物であった。また比留間はその後マンドリンの個人教授を始めるが、生徒も令息令嬢が集っていたという工藤の研究があったこと、また比留間自身が音楽取調掛の伝習生というエリートの出自を持っていることから、当時のマンドリンの文化の担い手は極めて限られた「エリート学生」であったことが証明された。その後各大学にマンドリンサークル、また大学のマンドリン科が少しずつ出現し始める。この点を細川は「雑誌の影響」と指摘していたが、上記のマンドリンサークル及びマンドリン科のほとんどが首都圏を拠点にしていたことから、雑誌の影響という細川の指摘は否定された。そして比留間、田中、武井、菅原といったリーダーシップを持った人々のもと全国大会が開かれたが、これも先述の首都圏一極集中の点を考えると「全国」大会とは言い切れないことが分かった。そして大学進学率を確認すると先述のように非常に低い数字を示していた。故にこれまでの推察における「エリート学生」自体が社会的には非常に限られた集団であることが分かったのである。

3.2 1923~第二次世界大戦期

第二節では細川の研究範囲以降の範囲を、1923年から第二次世界大戦期までの期間で記してゆく。この期間は一言でいえばマンダリン文化の成熟期と言えるであろう。その大きな契機となった出来事が二つある。一つは1924~25年のカラーチェ来訪、もう一つは1929年のセゴビア来訪である。

ラファエレ・カラーチェはイタリアの優れたマンダリン・リュートモデルノ奏者であり、作曲家であり、また楽器製作者でもあった。マンダリン発祥の地イタリアにおけるマンダリン界の第一人者であり、武井の言葉を借りれば「云うまでもなくカラーチェ氏は現代の伊太利に於ける巨星」であった（OST 1925,9）。現在もカラーチェの曲は日本でも頻繁に愛奏されており、また最も現代人がカラーチェの名を目にするのは代々彼の氏族が引き継ぎ作っている楽器であろう。声楽家でマンダリンも演奏したアドルフォ・サルコリが1911年より慶應で指導を始めたように（工藤 2014,4-5）、外国人演奏家の来訪はこれまでも少なからず存在した。しかし、日本でも愛聴される曲を多数書き、日本でも愛奏される名機を多数作った、まさにマンダリンの第一人者たるカラーチェの来訪が、日本のマンダリン界に多大なる影響を及ぼしたことは言うまでもないであろう。

ここで今回の調査において、「文化が盛り上がった」と判断する点を説明する。それはこの年表の人物同士の「つながり」である。とあるイベントにおいてそれぞれの人物が一堂に会することは、それだけ多くの注目を集めているからである。この点で、本調査においては中野二郎を排することはできない。彼は首都圏を拠点としていた他の人物と違い名古屋を拠点としており、比留間や武井よりも一世代若い。先述のように当時はまだマンダリン文化が首都圏一極集中だった故に、名古屋にいた彼が他の人物たちとつながる地点を見逃すことはできないであろう。もちろん、カラーチェ来訪とセゴビア来訪にも彼は携わっている。カラーチェは来訪時東京のほか京都、名古屋で「カラーチェ大演奏会」と題した演奏会を開催し、さらには宮廷でも演奏した（工藤 2014,2）。カラーチェ来訪時、中野は東京にこそ来てはいないものの、名古屋の市末広座にて開催された演奏会に、ピアノ伴奏の譜めくりとして携わっているのである（工藤 2021）。

表 5

	1925	1926	1927	1928	1929
中野二郎	1月25日 カラー チェ大演奏会 名 古屋市末広座にて 開催(工藤,2019 23) ピアノ伴奏者の譜 めくり	結婚 7月2日 二郎初め てのギターリサイ タル「中野二郎ギ ターのタベ」開催 同月30日 二郎の マンドリン独奏が 初めて放送される	12月 二郎指揮 「ナゴヤ・マンド リンオーケスト ラ」創立 同月3 日放送に出演	10月28日 第一回 演奏会	セゴビア来朝により武 井守成と会う(工 藤,2021 42-46) この会合以降武井の 「マンドリンとギター 研究」に寄稿などはし ている? (☞関係が2, 3度記事になっている のみ)
武井守成	カラーチェ来朝 武井文庫復活 霞ヶ関離宮にて瑞 典皇太子同妃両陛 下の御前で演奏 単行本「マンドリ ン・ギター片影」 を出版	男爵になる			セゴビア氏来朝、帝国 劇場にてリサイタルを 開く 依頼により曲目 解説を書く 来朝によ り中野と会っている (ARMONIA,1954 30) 創立15周年記念演奏 会を開く イタリア大 使アロイジより祝品を 贈呈される

そして、カラーチェ来訪時の盛り上がりは何より当時オーケストラ・シンフォニカ・タケイ(先述のシンフォニア・マンドリニ・オーケストラの後継団体)の発行していた雑誌『マンドリン・ギター研究』において確認することができる。「幸多き我斯界に今又カラーチェ氏を迎え得る事は非常な福音であると云はねばならない。」(OST 1925,9) また、これを受けて『マンドリン・ギター研究』1925年2月号は、全33ページにわたってカラーチェ特集号を発行している。カラーチェ来訪により、日本のマンドリン文化は全国各地でかつてない盛り上がりを見せたと言ってよいだろう。

次に1929年のセゴビア来訪である。アンドレス・セゴビアはスペインのギター奏者であり、「クラシック・ギター奏法の父」と称えられる20世紀を代表するギター奏者である(竹内 2022,103)。そして中野はここで、武井とついに会うことになる(工藤 2021)。

セゴビア来訪時の衝撃については、まずは『マンドリン・ギター研究』から引用したい。「セゴヴィアの来朝は我邦の樂界に二つの貢献をなした。其第一は云ふ迄もなくギターと云ふ樂器の眞價を廣く知らしめた事である。.....第二の貢献は親しくギターを研究しつつある人々にあらゆる演奏技巧を實際に教示した事である。」(OST 1929,19)、そして竹内(2022)にもセゴビアに関する記載が多い。竹内はセゴビアの来日の衝撃について、先述のサルコリがギター独奏を行ったことで、日本のマンドリン界及びギター界に独奏の機運が高まっていたことの系譜に、華麗なるヴィルトゥオーゾであるセゴビア来訪との衝撃もあ

ると指摘している（竹内 2022,90-103）。慶應義塾マンドリンクラブ出身のギター独奏者関根文三の活動も、家庭の事情により短命に終わり、武井及びオルケストラ・シンフォニカ・タケイのギター独奏も、1921年のギター独奏ジョイントコンサートの大失敗に終わっている。1926年、横浜にて池上富久一郎が日本人初のギター独奏コンサートを開いたという記録はあるものの、彼も精力的に活動していたわけではない（竹内 2022,136-137）。機運は高まるが中々良い演奏が聴くことはできない、そんなある種もどかしい状況を一撃で打破したのがセゴビアだったのである。セゴビアの来日以降は、大河原義衛、小倉俊、そして中野二郎のようなギタリストが本格的にリサイタル、作曲といった活動を開始し、ギター界の発展につながってゆくのである（竹内 2022,185）。ここでギター独奏に関する機運について追記をしておくと、竹内は武井の演奏家としての挫折後のギター独奏曲作曲及びギター研究に関しても、ギター独奏への機運を高めることに一役買っていたと指摘している。武井は日本のギター曲、日本人でなければ書けないギター曲の必要性を解き、1919年からギター独奏曲の作曲を開始し、1926年にはその数は20曲を数えるまでになっていた（竹内 2022,124-125）。最終的に武井は自作曲を100曲以上作曲したが、そのうちギター独奏曲は58曲を数えるに至っている（竹内 2022,126）。また武井のギターにかける思いは、ギター研究者という形でセゴビア来訪時にも現れており、『マンドリン・ギター研究』に以下のような記載がある。「セゴヴィアの送付し来つた曲目は前號に掲げたが、私は帝劇文藝部の依頼の下に、此プログラムを成可く正しく書き直さうと努力した。然し作品番號もなく、只曲名を可成省略して書き下されて居る為、見當のつき憎いものには全く似て閉口した。.....此點について私はセゴヴィア来朝後極東の此一島国が藝術に對して如何に眞摯に動いて居るかを悟つて恐らく一驚を喫するであらう事を考える。優れた演奏家こそ少なけれ、我邦のギター研究家が如何に真面目な道を進んで居るかは彼の想定外の事実であらう。」（OST 1929,39）この記載から見るに、武井の自身及び日本のギター研究についてのプライドの誇示が読み取れる。武井の言及通り優れた演奏家こそ当時は少なかったものの、ならば研究に精を出すという形で、武井は作曲及び研究活動を続けていたのである。当然自身の挫折からセゴビア来訪までは、優れた演奏家を日本から排出する、育てるといった心意気はあったであろう。しかしセゴビアが来訪してしまったためか、上記の引用からは若干の落胆、卑下のニュアンスも感じ取られる。ともあれ、武井が自身の挫折後も研究に精を出し、ギター独奏の発展につとめていたことはこの記載から十分に読みとれるであろう。しかしながら、1929年から1941年までの12年間は、ギター独奏曲を一曲も作曲していない（竹内 2022,126）。竹内はその理由について、1929年のセゴビア来訪によるものだとしている（竹内 2022,126）武井にとっては幸か不幸か、セゴビアの衝撃があまりにも大きかったことの一エピソードとしてこの一連の竹内の指摘を紹介した。セ

ゴビア来訪後のギターの発展について少し話を戻すと、カラーチェ来訪について、セゴビアのような「独奏の発展」という指摘がされている研究はなく、またカラーチェ自身マンドリン合奏の指揮も来日公演にて希望していた点から考えると（OST 1925,9）、同じ文脈で語られることの多いマンドリン・ギターの中でも両者の毛色の違いがこの段階から見えてくるのである。カラーチェとセゴビアの来訪は、ただマンドリンの名手とギターの名手が来て日本が盛り上がったというだけでなく、マンドリンはマンドリン合奏、ギターはギター独奏、と互いの目指す方向性を決定づけるほどの大きな出来事だったともいえるだろう。

カラーチェ、セゴビア来訪時に中野と武井に「つながり」が確認されたが、この時期にはそれ以外の「つながり」も数多く見受けられる。まず先述の内容かつ時期が第一節と被るものの、1922年の菅原の同志社大学マンドリンクラブの技術顧問就任が挙げられる。表6を参照されたい。就任当初の1919年、菅原は奈良を活動拠点としていたため、当時の同志社の部員熊谷忠四郎が菅原の存在を知り、練習を見てもらい、続いて指揮も依頼することになったことが技術顧問就任の契機であった（同志社大学マンドリンクラブ百年史編集委員会 2010,12）。彼の指導の結果として、コンコロソの第一回、第二回連覇があることを考えれば、菅原と同志社とのつながりがマンドリン界全体に大きな影響を与えたことが分かる。また第一節においてコンコロソの首都圏一極集中を指摘したが、コンコロソ自体も首都圏の団体、業界の著名人が一堂に会する、つまり多数の「つながり」が生まれたという点で、文化の興隆を象徴しているのは間違いないであろう。追記しておく、菅原の次の同志社大学マンドリンクラブ技術顧問は中野であるが、中野を技術顧問に推挙したのも菅原だという（同志社大学マンドリンクラブ百年史編集委員会 2010,26-27）。次に1931年の、仙台エストゥディアンティーナ「アルモニア」(以下アルモニア)5周年記念第九回演奏会での中野の独奏が挙げられる。表7を参照されたい。ここで中野はアルモニア主催者でギタリストの沢口忠左衛門とつながっている（工藤 2021）。アルモニアは名の通り仙台の団体であり、発足は1924年である。沢口とマンドリン・ギター音楽との出会いは1924年ごろだったとされており、演奏旅行に仙台へたまたま来たマンドリンクラブの演奏を聴いて感動したのだという（竹内 2022,160）。首都圏を介さず仙台の沢口と名古屋の中野とで交流が生まれていたことは、マンドリンの全国各地への拡大と、文化の興隆を表していると言って過言ではないだろう。また上記の記載から考えると、例えばオーケストラ・シンフォニカ・タケイなどのマンドリン界をリードする団体が演奏旅行に行き、それが沢口に影響を与えたとすれば、そのような記載がなされるはずである。しかし沢口が出会ったマンドリンクラブが竹内の資料にも明記されていないことから、この1920年代中頃の時期には、さほど有名でないマンドリンクラブでも仙台への演奏旅行が行われ

るほど、一世代前と比べてマンドリン界の興隆があったということの証明にもなるであろう。つながりとはややそれるが、この頃にはほかにも東北帝国大学にマンドリンクラブが創設（竹内 2022,161）、また社会人団体においても、北海道に1923年北方マンドリン倶楽部が創設され、また1925年には長崎にて長崎アニマ・マンドリーノ合奏団が創設、さらには中野が1927年名古屋でナゴヤ・マンドリンオーケストラを創設するなど、地方にも団体の発足が目立っており（工藤 2014,3-6）、マンドリンの全国各地への拡大は着々と広がっていったのである。

表6

	1919	1920	1921	1922	1923	1924
菅原明朗	年間を通して「マンドリンとギター」誌に度々寄稿 3月 奈良に居を移す 11月に再度上京			画家・音楽家の二重生活から音楽に専念する 11月、同志社大学マンドリンクラブの技術顧問となる		
武井守成			「ギターの夕」を開く 宮内省楽部長を兼任	英国ボーン文庫の大半を譲受け武井文庫とする。 ギター曲「タルレガに捧ぐる曲」「野遊び」を出版	1月、第一回全国マンドリン合奏コンクールを実施 関東大震災により武井文庫と楽器が消失 総会を帝国ホテルで開き「オーケストラ・シンフォニカ・タケイ」と改める	機関誌を「マンドリン・ギター研究」と改名 OST第16回演奏会より大沼哲を迎える 単行本「マンドリン・ギター・及其オーケストラ」刊行 8月、第一回独奏曲コンクールを開催 11月、第二回コンクールを実施 カラーチェ氏来朝、OST主催演奏会を開く

表7

	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931
マンドリン略史	澤口忠左衛門主催によりエストゥディアンティナー・アルモニア・ディ・センダイが創設	OSTにより本邦初のマンドリン合奏がラジオ放送	アルモニア第一回演奏会					
比留間賢八	松原（世田谷区）に移る マンドリン講師もやめ、松原での余生を楽しむようになる			賢八からの厳しい教えを受けた絹子、JOAKよりマンドリン独奏を初披露				
中野二郎	5月25日 二郎指揮「桑名マンドリン倶楽部」第一回演奏会が開催 門下生中心 11月29日 二郎初めてのリサイタル「中野二郎マンドリン独奏会」を開催	1月25日 カラーチェ大演奏会 名古屋市末広座にて開催(工藤,2019:23) ピアノ伴奏者の譜めくり	結婚 7月2日 二郎初めてのギターリサイタル「中野二郎ギターの夕べ」開催 同月30日 二郎のマンドリン独奏が初めて放送される	12月 二郎指揮「ナゴヤ・マンドリンオーケストラ」創立 同月3日放送に出演	10月28日 第一回演奏会	セゴビア来朝により武井守成と会う(工藤,2021:42-46) この会合以降武井の「マンドリンとギター研究」に寄稿などはしている? (も関係が2,3度記事になっているのみ)		6月6日 アルモニア5周年記念第九回演奏会にて沢口忠左衛門に招かれ独奏 独奏がJOHK仙台で放送 その後ギター一曲の作曲に精を出すようになる

加えてここで指摘しておきたい点が、ラジオ放送、レコードの影響である。この段落でも表7を参照されたい。細川は先述の通り1923年以降徐々に電気録音・ラジオ・外国資本のレコード会社等が発展してゆき、洋楽民主化にそれ以前よりも強く拍車をかけた旨指摘しているが、この影響はマンドリンにも大きく表れている。まず1925年にオーケストラ・シンフォニカ・タケイが本邦初のマンドリン合奏をラジオ放送している。また比留間の行にあるように、比留間の娘でマンドリン奏者として活躍した比留間きぬ子が1927年にJOAKよりマンドリン独奏を初披露している。またカラーチェ・セゴビア来訪時の日本各地での盛況についても、レコードの影響は無視できないであろう。『マンドリン・ギター研究』1929年10月号、1932年8月号にもセゴビアのレコード評が確認されている。特にカラーチェと違い演奏家としてのみの活動にとどまったセゴビアが来訪によって日本中に熱狂を及ぼしたのも、レコードの影響あってこそだろう。こうした技術発展の助けもあり、この第二節で対象とした時期にはマンドリンの成熟と首都圏を飛び越えた地方での文化興隆が起こったのである。

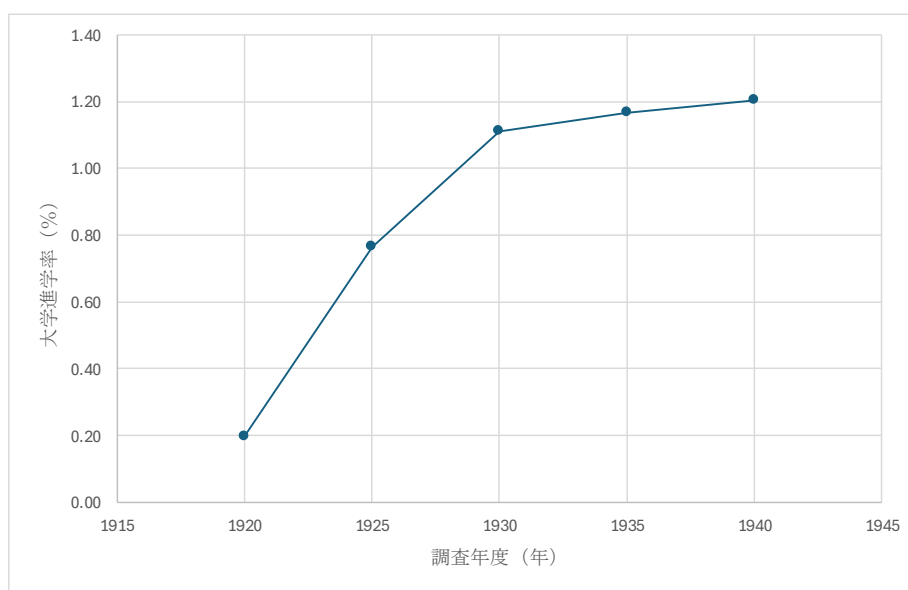
では、第一節と同じくここで大学進学率の推移を見てゆく。1920年の0.20%から一転、1925年には0.77%にまで増えている。続く1930年には1.11%、1935年は1.17%、1940年は1.20%と着実に増えている。1920年時と比べ20年で6倍の成長率を見せているのである。しかし、当然後述の1970年以降、及び現代からすればまだまだ極めて少ない割合であることは明白である。第二節ではマンドリンの全国的な文化興隆、成熟を指摘してきたが、あくまでもマンドリンは20~24歳の人口の中でも極めて限られたエリート学生内での小さな文化だという事は、この時期においても変わっていないのである。しかし、極めて少ないながらも着実にマンドリン人口が増えており、その間で先述のような文化興

隆が起こっていたのである。この事象をあえて言い換えるならば、「都市中間層が消費生活を享受する基盤が整った」とは言えないだろうか。当然この先述の細川の論の対象とするところよりは人口は少ない。しかし、名古屋、仙台をはじめとしたある程度の「都市」のエリート学生に比較的広くマンドリンが享受されていたのがこの時期なのである。すなわち、細川の指摘する「デモクラシィ」はマンドリンにおいてはこの1923~戦前の時期があてはまるのである。

図1

	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930
20~24歳の人口動態			4609310					5060527					5,531,506
大学生数・大学進学率	9040		0.20%			38731		0.77%			61502		1.11%

	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940
20~24歳の人口動態					6,071,071					6,103,653
大学生数・大学進学率			70893		1.17%			73517		1.20%



以下に第二節の内容を総括する。細川の研究範囲を超えた本節において、文化の興隆を示す大きな出来事を二つ取り上げた。一つはカラーチェ来訪である。優れた演奏、優れた作曲、そして優れた楽器作成において現代でも名を不動のものにしているカラーチェの来訪は当時の日本のマンドリン界を熱狂の渦に巻き込んだ。もう一つはセゴビア来訪である。ギターの優れた演奏家であるセゴビアの来訪は、当時ギター独奏の機運が高まりつつも中々優れた演奏家が現れないという、もどかしい日本のギター界に衝撃を与え、ある種カラーチェを超えるような反響を呼んだ。この二人の来訪により、マンドリン界とギター界である種この先の行く道を分けたとも考察できる。また、本節において文化の興隆を示す重要な点として「つながり」を挙げた。その結果、カラーチェ、セゴビア来訪時は名古屋を拠点として活動していた中野を中心として多数のつながりが生まれていた。またこの時期には首都圏を飛び越え仙台や北海道でもマンドリン団体の創設が確認され、首都圏を介さずとも多数のつながりが生まれていた。大学進学率を見ても、少ないながらも1920年時と比べ20年で6倍の成長率を見せた。第一節で指摘した通りマンドリンはこの時期にはまだ「エリート学生」文化を抜け切れていないものの、文化興隆は第一節時点に比べると非常に多いことから、細川の指摘する「デモクラシィ」はむしろこの第二節の時期に起こったと考えられるのである。

3.3 戦後~1970年代

表8を参照しつつ戦争の時代について論じてゆくこととする。1936年の盧溝橋事件、日中戦争勃発から日本は戦争の空気に飲まれていくこととなり、1939年に第二次世界大戦が勃発してからは、1945年の終戦まで日本に暗い影が落とされていたことは言うまでもない。これは当然ながら、マンドリンにも作用した。1936年の比留間の死が時期を重ねるのは偶然であろうが、日本のマンドリンの創始者の死と時を同じくして、1937年オーケストラ・シンフォニカ・タケイは定期演奏会を二年間中止する。これには武井が役人、特に男爵であった点で(ARMONIA 1954,30)、日中戦争による活動自粛を受け入れざるを得なかった結果であろう。その後1939年に再開するもやはり1943年には演奏活動を中断、中野に関しても1940年に皇紀2600年記念マンドリン合同演奏会に参加するなどしているが、武井と同じく1943年には活動を中断している。ここで歴史を概観して注目すべき点が三つある。一つ目はマンドリンがあくまでも外国文化であることだ。戦時中日本的な価値観が強制され、外国文化、特に敵国の文化への排斥が進んだが、その中で同盟国であるイタリアの文化とはいえ、マンドリンが他の日本的な文化に比べて低い地位を与えられていたことは想像に難くない。直接の関係はないと思われるが、1938年の洋画輸入禁止、1943

年の米英楽曲禁止など、戦時中は洋楽及び外国文化全体が落ち込んだ期間だったのである。同志社大学にも、「演奏曲目は、憲兵隊の許可を得なければなりませんでしたが、笑わせられたのが敵性国、即ち英・米の音楽は駄目で、日独伊三国とスペインの音楽は可というものでした。」(同志社大学マンドリンクラブ百年史編集委員会 2010,30) といった記録が残っている。二つ目は20~24歳の人口動態である。同行を見てみると、1940年には6103653人だったのが、1945年には5464684人と減少している。これには全体数で見ると割合は少ないながらも、1943年の学徒出陣、1944年の学徒動員の通年施行は影響しているとみて良いだろう。同志社も部員は全員それぞれの兵役につき、戦死したものもいたという記録が残っている(同志社大学マンドリンクラブ百年史編集委員会 2010,33-34)。マンドリンは一部のエリート学生の文化だったという事は先述の通りだが、その担い手である学生に対しての学徒出陣、学徒動員の施行は、ある意味この地点で文化を一時ストップさせたとも見てよいだろう。三つ目は1938年施行の国家総動員法である。国家総動員法は総力戦遂行のために国家のすべての人的・物的資源を政府が統制運用できる旨を規定した法律であるが、この法律により大きなダメージを受けたのは楽譜、楽器である。同志社は楽譜、楽器をすべてOBに保管を依頼し、京都には大きな戦災もなかったことから、ほとんど被害は受けなかった(同志社大学マンドリンクラブ百年史編集委員会 2010,32-33) といった稀有な例もあるが、東京のクラブだとそうはいかなかったようである。慶應義塾マンドリンクラブ(KMC)の当時の実情についての記載を引用する。「部員の個人的な苦しさは言うまでもなかったが、KMC自体も苦しかった。それはひとつには、楽器の紛失があったからである。三田の慶應義塾に駐屯した米兵によって、楽器、楽譜が燃やし尽くされてしまったのである。彼らは、丁度冬を迎えようとする日本に渡ってきたが、防寒設備などない当時のことで、寒くてたまらなかった。そこで、ティンパニーを釜代わりにし、楽器、楽譜を燃やして暖をとったのである。」(同志社大学マンドリンクラブ百年史編集委員会 2010,34) ここから推察するに、楽譜、楽器の管理が個々人にゆだねられる社会人サークルなどよりも、大学などのある機関に属しているクラブほど、管理の決定権に欠ける以上甚大な被害があったと考えられる。この三点を総じて、戦争はマンドリン界、特に大学サークルの活動を破壊したと言えるだろう。

表 8

	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	1946	1947	1948	1949	
歴史	盧溝橋事件 日中戦争 日独伊三国同盟	日中戦争 国家総動員法	第二次世界大戦勃発	日独伊三国軍事同盟条約調印	日ソ中立条約締結 独ソ戦争開始 太平洋戦争勃発	ミッドウェー海戦(戦局の転機)	学徒出陣	学徒動員の通年施行	東京大空襲 太平洋戦争終結 国際連合設立					
歴史(文化・学生関係)	日中戦争勃発で活動自粛 徐々に演奏会や外国人演奏家の来日が減る	洋画輸入禁止		レコード発売数が減少	情報局が音楽雑誌の統合を命令		米英楽曲禁止				学校教育法施行		国立学校設置法施行	
20~24歳の人口動態				6,103,653					5,464,684					
大学生数・大学進学率		73517		1.20%			104699		1.92%			128013		
中野二郎	7月 二郎作の童謡「一茶さん」が大ヒット			11月18日 皇紀2600年記念マンドリン合同第演奏会 同月26日 第四回演奏会よりナゴヤ・マンドリンオーケストラを「名古屋マンドリン楽団」と改称		6月25日 第七回演奏会にて二郎作「象徴日本」を初演	7月11日 戦時中のため活動を中断		三重に疎開 4月1日 NHK名古屋放送管弦楽団・同放送合唱団の常任指揮者に就任(～1963) 12月6日 名古屋マンドリン楽団 練習を開始					
武井守成	OST定期演奏会を中断		OST、堀清隆が指揮に加わり再開			「ギターの夕」を開く 「マンドリン・ギター研究資料」と改名し発行	演奏活動を中断 「マンドリン・ギター研究資料」廃刊			式部頭に補せらる	本官を免ぜらる		OST復興第一回演奏会を開催 12月14日 死去	

	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	
朝鮮戦争勃発	サンフランシスコ平和条約調印 民間放送の開始・特需景気		テレビ放送の開始		ワルシャワ条約機構成立 高度経済成長期突入										東海道新幹線開通・東京五輪開催				文化庁設置				
												国立総合大学廃止											
	7,804,536				8,475,954						8,390,982					9,127,519					10,727,636		
	1.64%		446427		5.27%				578060		6.89%			794100		8.70%			1270189		11.84%	1468538	
					4月より月一度「歌の花壇」という放送番組を持つ			子供を対象とした番組「声くらべ」開始(～1963)															
									OST解散														

戦後の1949年、オルケストラ・シンフォニカ・タケイは復興第一回演奏会を開催するも、同年武井は没することとなった。菅原はとうの昔にマンドリンを離れ、中野もこの頃には1945年より就いたNHK名古屋放送管弦楽団・合唱団の指揮がメインで、1963年の同志社大学マンドリンクラブ技術顧問就任までは、マンドリンにおいて目立った活動はしていない。第一節、二節の時期を支えてきた立役者たちがいない中、マンドリンの文化を支えた、というよりむしろ大衆化に導いたのは、戦争で壊滅的被害を受けたはずの学生サークルであった。

工藤は戦後 1960 年代に新設されたクラブは 87 校で、2014 年時点で活動していたマンドリンクラブ全 143 校のうちの約 6 割を占めており、他の多くの大学もその前後に成立し、1970~1980 年に全体数の最盛期を迎えていると指摘している(工藤 2014,1)。ここで工藤の作成した大学マンドリンクラブの創立年の推移の図を確認してみると、以下の事が分かる。まず 1910 年から 1944 年までで 2014 年まで活動を継続しているマンドリンクラブは全国を合わせてもわずか 10 校にとどまっているのである。しかしこれには戦争により統廃合されたクラブが非常に多い故に、データとして少なく出ているだけだとも読み取れる。1950~1959 年代は 10 年間で 18 校増えているが、興味深いのは中部、中国、四国地方に初めてのマンドリンクラブが創設されている点であろう。中部地方は名古屋大学ギター・マンドリンクラブ、四国地方は高知大学マンドリンクラブ、中国地方に至っては鳥取大学マンドリンクラブ、岡山大学ギター・マンドリンクラブ、山口大学マンドリンクラブと 3 校が創設されている。こうして羅列すると国公立大学が多いことに気が付くが、そこで歴史の行に目を向けると、1949 年に国公立大学設置法が施行されていることが分かる。国公立大学設置法により特別の地域(北海道、東京、愛知、大阪、京都、福岡)、いわゆる東北を除く旧帝国大学の地域以外は、同一地域にある官立学校が合併され、一大学となった(文部省 1981)。この法律の施行により一府県一大学の実現が図られたため、地方にも制度の整った大学が生まれ、故にマンドリンクラブが創設される土壌も育まれたのであろう。その結果は先述のデータが示す通りである。1960~1969 年に入ると、クラブの創立は 86 校という、先述の通りではあるものの改めて見ると驚異的な数字をたたき出している。1970~1979 年代に入ると 9 校の創設に留まるので、「大衆化」という見方では 1970 年初頭頃に大衆化のピークを迎えていると言えるであろう。1962 年には今までマンドリンクラブのなかった唯一の地方だった北陸にも富山大学ギター・マンドリンクラブが創設され、日本全土へと学生クラブは広がったのである。

表9—工藤（2014）からの引用

創立年の推移（大学）

現在活動中の団体のうち創立年判明分 133 大学

年代	北海道	東北	関東	北陸	中部	関西	中国	四国	九州 沖縄	合計
1910～1944	1		4			4			1	10
1945～1949		1				1				2
1950～1959	1		5		1	4	3	1	3	18
1960～1969	3	4	30	2	9	22	7	3	6	86
1970～1979			6	1		1			1	9
1980～1989					2				1	3
1990～1999							1			1
2000～2009		1	1			1				3
2010～		1								1
合計	5	7	46	3	12	33	11	4	12	133

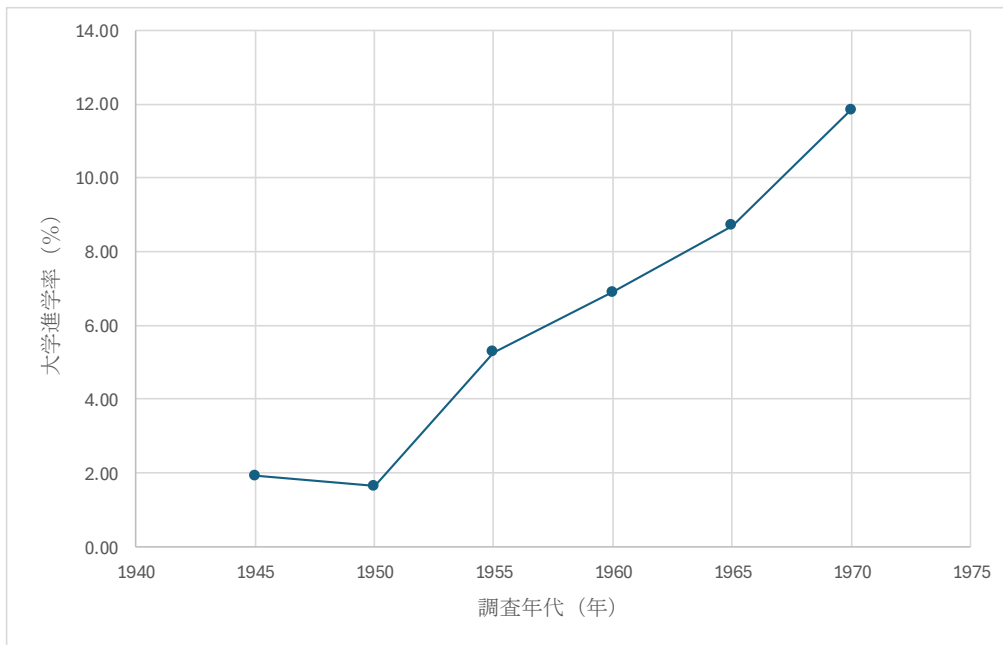
肝心の大学進学率についてここで目を向けることとする。戦後と題したが、第二節の続きの1940年から確認してゆく。1940年は1.20%、1945年は1.92%と順調に増加している。1950年でいったん1.64%に落ち込むが、調査上1945年の大学進学率は1943年の学生数のデータを用い、1950年の大学進学率は1948年の学生数のデータを用いているため、戦争による貧困、学徒動員の影響で学生数が減った故の結果だと推察できる。そして、1955年に入るとなんと5.27%にまで膨れ上がるのである。1950年の朝鮮戦争による特需景気、1951年のサンフランシスコ講和条約などの戦後復興の影響も大きいことは容易に想像できるが、ここで目を向けるべきは1947年の学校教育法施行、及び先述の1949年国立学校設置法施行である。学校教育法は学校の種類や各学校の教育年数などといった現在の学校制度の基盤となる法律である。つまり、整った学校教育へのはじめの一步を国を挙げて踏み出したのがこの法律の施行だったのである。学校教育法施行により学制が整えられ、「大学」が改めて誕生したことが、学生数の増加に多大なる影響を及ぼしたのはデータが物語っているであろう。その後、1955年高度経済成長期突入を契機に1960年が6.89%、1965年が8.70%、1970年が11.84%と、非常に増加している。あえて言うならば、1930年には100人に1人だった大学生が、1970年には10人に1人になったのである。つまり、ここでようやく大学が「大衆化」したといえよう。先述の学生マンドリンサークルの急激な増加は、大学進学率の驚異的な増加によって説明できる。すなわち、大学の「大衆化」によって説明できるのである。そしてこの相関から考察すると、大学が「大衆化」したことによって、1901年から戦後まで長らく「エリート学生」文化だったマンドリンが、もはやエリートの域を飛び越えていることが分かる。学校教育法施行と国立大学設置法を契機とした大学進学率の増加が、マンドリンの「大衆文化」への発展を説明するのであ

る。

図 2

	1941	1942	1943	1944	1945	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955
20~24歳の人口動態					5,464,684					7,804,536					8,475,954
大学生数・大学進学率			104699		1.92%			128013		1.64%			446427		5.27%

	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970
20~24歳の人口動態					8,390,982					9,127,519					10,727,636
大学生数・大学進学率			578060		6.89%			794100		8.70%			1270189		11.84%



以下に第三節の内容を総括する。第二次世界大戦はマンドリン演奏の音色を全国的に止めたが、マンドリンが舶来の文化である点、学徒動員施行による20歳から24歳までの人口の減少、国家総動員法施行による楽譜、楽器の喪失といった要因で、特に大学のマンドリンサークルは極めて大きな被害を受けた。しかし、戦後マンドリンを大衆化に導いたのはその甚大な被害を受けたはずの大学サークルであった。工藤のデータを読み取ると、1950~1959年代は中部、中国、四国地方に初めてのマンドリンクラブが創設され、1960~1969年に入ると、クラブの創立は86校という驚異的な増加を見せている。この背

景として本論では 1947 年の学校教育法施行、及び 1949 年国立学校設置法施行を指摘している。日本の教育体制の基礎が整えられたことにより、大学進学率が急激に増加し、マンドリンサークルが活動する基盤も整えられたということである。ここで本当に大学進学率が増加したのかと調査結果を確認すると、1930 年には 100 人に 1 人だった大学生が、1970 年には 10 人に 1 人になるまでに驚異的な増加を見せているのである。この第三節の期間になってようやく、マンドリンが「大衆化」したと初めて言及する事ができるのである。

4 考察

本研究の結果として、第一章で掲げた「マンドリンは戦前までエリート大学生の限られた文化だったものが、戦後若者及び大学生の急増により 1970 年ごろ大衆化した」という命題は証明されたと言えよう。日本におけるマンドリンが辿ってきた史観を細川の論を発展、深化させる形でより詳しく記載すると、「マンドリンは洋行帰りのエリートによってまず同好会が組織され、その後まもなく都市学生、青年の間で大学・高等学校を中心としたサークルが首都圏を中心に広がり、彼らの強いリーダーシップの下、大震災前に大会を持った。その後戦前までの間で、外国人演奏家の来日、ラジオ放送などの影響で首都圏を飛び越え全国的にエリート学生文化として成熟していった。戦後教育体制が整ったことによる大学生の急激な増加、大学の大量化に伴いクラブ数も増え、マンドリンは大衆文化となった。」という形になる。

細川の論は指摘されている 1905 年から 1923 年までの範囲内ではおおむね正しい論を展開しているが、彼が日本の近代音楽史と絡めてマンドリンを論じている点については、それがマンドリンの歴史の実態とはズレが生じていることが分かった。細川の近代音楽史では 1905 年に洋楽の日常化が始まり、1923 年までの間で都市中間層が消費生活を享受する基盤が生まれ、その後は都市中間層を飛び越えて大衆化が始まるとされていたが（細川 2020）、マンドリンは 1901 年に産声を上げ、1923 年以降から一部のエリート学生間で文化が成熟、つまり文化を享受する基盤が生まれている。エリート学生を飛び越え大衆化への一歩を踏み出したのは戦後 1960 年代及び 1970 年代に入ってからだったのである。より簡潔に言及するなら、細川はこの 1905 年から 1923 年までの範囲を、日本の近代音楽史における「デモクラシイ期」としており、その一例としてマンドリンに言及した。しかし、彼の研究範囲以降の調査により、むしろ彼が指摘する「デモクラシイ」はマンドリンにおいては大正時代以降に起こった事が分かった。上記で指摘した「ズレ」の内容はこれである。本論文の成果として、細川の研究よりも範囲を拡大し、様々な方面からの文献を用い

た研究を行ったことで、より広範囲かつ精度の高いマンドリン史の作成、及びそれに対する考察ができた。さらに大学生の人口動態及び社会情勢に目を向け、マンドリンの文化興隆と照らし合わせることで、両者に密接な関係があることが分かった。すなわち、マンドリン文化を育み大衆化した人口層はまぎれもなく学生層であり、彼らの人口動態及び社会情勢が、マンドリンの文化興隆に強く作用することを示すことができたのである。総じてマンドリン史及びマンドリンに関する学術研究の新たな見方を示したと言えよう。

本研究の発展に関して、期待される点が二つある。一つに 1970 年以降の歴史分析を行う事が期待される。本研究では大正時代からを調査範囲にしていたため、細川のいう「優れたリーダーシップ」を持つ比留間賢八、菅原明朝、中野二郎、武井守成に着目することで、大正から昭和初期までの時代は歴史調査がしやすかったものの、彼らが消えた戦後以降は通史作成に工藤(2014)のデータを用いるにとどまった。これは当時代から「大衆化」したこと、つまり「優れたリーダーシップ」を持つ人々が上から下に文化を興隆させていた前時代と比較して、大学クラブを中心とした「下から上へ」文化が興隆していったことの裏返しと言えるだろうが、よりボリュームを増やした調査を期待したい。加えて工藤の調査自体も 2014 年のものであり、現代史における 2020 年以降の COVID-19 によるパンデミックの影響は計り知れない故、より最新の調査も求められるであろう。二つ目は先行研究及び調査に用いる変数の多様化である。本論では近代日本の音楽史に関して、マンドリンに関する記載が確認されたため細川の研究を先行研究として採用したが、細川のもの以外の近代音楽史に目を向ける事により、また違った視点からマンドリン文化を論ずることができるであろう。また調査に用いた変数について、今回は「マンドリンはエリート学生の文化である」という仮説のもと大学進学率を採用したが、また違った変数を用いることで視点を変えてマンドリン文化を論ずることができるであろう。

筆者は先述の COVID-19 によるパンデミックの影響の中、同志社大学マンドリンクラブに入部し、マンドリンという音楽の文化の豊かさと特異さにのめり込んでいった。本論文でそんなマンドリンが辿った特異な文化の歴史をこのように解き明かすことが出来大変嬉しく思う。それと同時に、自らがマンドリンの文化興隆に強く作用する学生であったことに、襟を正されたような気分になった。コロナ禍の中でのクラブ活動は沢山の苦難があり、やむを得ず潰れたクラブの話も多く聞いた。本論文がそんな苦境に今立たされているマンドリン文化の少しの支えになれば、筆者明利につきるというものである。イタリアで生まれ、一時期は民族楽器としての域を中々でなかったものの、本国では時代を重ねるにつれ非常に豊かな文化が育まれていったことを、我々は忘れてはならない。日本でも豊かな文化を育むことができるのは先人が示した、本研究が示した通りであることは明らかだ。日本においては、大正時代からその産声を上げた繊細で多彩なマンドリンの音色が、本

研究を通してより日本ならではの文化として成熟し、そして美しく美しいトレモロの音色が人々の心に永久に響き続けることを、筆者は願ってやまない。

5 参考文献

工藤哲郎,2016,「日本のマンドリン団体の全容」『JMU ジャーナル』(259):7-18.

吉田剛士,2022,『まるごとマンドリンの本』青弓社.

細川周平,2020,『近代日本の音楽百年－黒船から終戦まで 第2巻 デモクラシイの音色』岩波書店,1-3.

工藤哲郎,2014,“マンドリン略史,”*JMU* ジャーナル,4,(2024年11月21日取得,
<https://www.japanmandolinunion.com/2018/01/01/%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%AA%E3%83%B3%E7%95%A5%E5%8F%B2-%EF%BC%94-%E6%AF%94%E7%95%99%E9%96%93%E8%B3%A2%E5%85%AB-%E5%A4%A7%E6%AD%A3%E5%88%9D%E6%9C%9F/>).

工藤哲郎,2014,“マンドリン略史,”*JMU* ジャーナル,5:1-4,(2024年11月21日取得,
<https://www.japanmandolinunion.com/2018/01/01/%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%AA%E3%83%B3%E7%95%A5%E5%8F%B2-%EF%BC%95-%E6%98%8E%E6%B2%BB%E6%9C%AB%E6%9C%9F-%E5%A4%A7%E6%AD%A3%E6%9C%9F/>).

工藤哲郎,2014,“マンドリン略史,”*JMU* ジャーナル,6~7:2-9,(2024年11月21日取得,
<https://www.japanmandolinunion.com/2018/05/17/%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%AA%E3%83%B3%E7%95%A5%E5%8F%B2-%EF%BC%96-%EF%BC%97-%E6%AD%A6%E4%BA%95%E5%AE%88%E6%88%90%E3%81%A8o-s-t-s-m-o/>).

工藤哲郎,2014,“マンドリン略史,”*JMU* ジャーナル,8,(2024年11月21日取得,
<https://www.japanmandolinunion.com/2018/05/17/%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%AA%E3%83%B3%E7%95%A5%E5%8F%B2-%E3%81%9D%E3%81%AE%E3%81%AB%E5%89%B5%E7%AB%8B%E3%81%97%E3%81%9F%E7%A4%BE%E4>

<https://www.japanmandolinunion.com/2018/05/17/%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%AA%E3%83%B3%E5%80%B6%E6%A5%BD%E9%83%A8/>).

工藤哲郎,2014,“マンドリン略史,”*JMU* ジャーナル,11,(2024年11月21日取得,

<https://www.japanmandolinunion.com/2018/05/17/%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%AA%E3%83%B3%E7%95%A5%E5%8F%B2-%EF%BC%91%EF%BC%91-%E7%8F%BE%E4%BB%A3%E5%8F%B2-%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%83%96/>) .

南北社,1913,『早稲田生活』(1913,南北社), 国立国会図書館デジタルコレクション,
(2024年11月21日取得, <https://dl.ndl.go.jp/pid/951741>) .

文部省,1981,『学制百年史』 帝国地方行政学会.

総務省統計局,2020,「国勢調査時系列データ第二表 年齢(5歳階級), 男女別人口及び人口性比 - 全国(大正9年~令和2年)」(2024年11月15日取得, <https://www.e-stat.jp/dbview?sid=0003410380>) .

同志社大学マンドリンクラブ百年史編集委員会,2010,『同志社大学マンドリンクラブ百年史』12-34.

松下鈞編,1998,『マエストロの肖像-菅原明朗評論集』 国立音楽大学附属図書館大空社,478.

竹内貴久雄,2022,『1冊でわかるポケット教養シリーズ ギターから見た近代日本の西洋音楽受容史』 株式会社ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングスミュージックメディア部,90-185.

OST,1925,『マンドリン・ギター研究』1:8-9.

OST,1929,『マンドリン・ギター研究』10:19-39.

ARMONIA,1954,『ARMONIA-Bi-Monthly for Guitar』1:30.

佐藤信・五味文彦・高埜利彦・鈴木淳,2023,『詳説日本史』 山川出版社.

工藤哲郎,2021,『中野二郎とマンドリン 上巻』 絃楽器のイグチ.

6 付録(年表)

	1901	1902	1903	1904	1905	1906	1907	1908	1909	1910
歴史		日英同盟		日露戦争	ポーツマス条約		英・仏・露で三国協商締結 伊は機と対立し仏に接近			
歴史（文化・学生関係）					日比谷公園野外音楽堂完成・市民向け軍楽隊奏楽 （初の定期開催の市民向け音楽会） 『東京朝日』が同紙初めてとなる洋楽会回顧を行う		音楽取調標を設置	家庭音楽会設立		海軍軍楽隊が管弦楽を初公開
20・24歳の人口動態										
大学生数・大学進学率			4543					7517		
マンドリン歴史						大阪音楽協会第一回演奏会にて高濱孝一がマンドリンを演奏				田中常彦を中心として慶應マンドリン倶楽部創設 同志社大学マンドリン倶楽部創設
比留間賢	帰国 はじめてマンドリンを持ち帰る 神田錦町に居を構え、日本ではじめてマンドリン及びギターの奏法を教え始める 明治音楽会演奏会にはじめてマンドリン独奏を演奏 チェッシー「セレナーデ」	陸軍被服？より通訳を囑託される 音楽学校「奏楽堂」において開催の慈善音楽会にて、グァイオリンと合奏	8月 鈴木政吉とともに日本で最初のマンドリンを制作 11月 独習用の「マンドリン教科書」を共益商社より発行		日本最初のマンドリン四重奏団を組織	東京上野美術学校に日本初のマンドリン合奏団を組織 6月 神田YMCA「楽苑会」第一回演奏会にて演奏 11月「慶應義塾ワグネルソサイエティ」第八回演奏会にて日本最初のマンドリン合奏の公開演奏を行う	「学生連合音楽会」に出演 慶應義塾五十周年記念「音楽会」に出演 8月 マンドリン音楽通信教授を計画 「通信教授用紙」「試験用紙」を執筆・出版	通信教授「マンドリン好楽会」開始 米国シカゴ市サミュエル・シーグル「コロスボンデン・スクール」マンドリン科五十のレッスンを受講開始 後に修了		『マンドリン独習』を共益商社より発行
菅原明朗	4月 私立明石幼稚園に入園、賛美歌に触れる また吹奏楽隊を聞く			姉の幸から楽譜の読み方を教わる				5月 プロテスタントの洗礼を受ける		4月 柏原中学に入学
中野二郎		4月10日 音楽好きの父喜平のもとに愛知県瀬戸市に生誕								
武井守成										

1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922		
王正成英	第一次護憲運動		7月29日 第一次世界大戦勃発 9月23日 日本がドイツに宣戦布告	中国に21カ条の要求を提示			第一次世界大戦終結 北支那特權 高等学校令・大学令制定	ベルサイユ条約締結 大衆文化の発生	田原進堂帰国 日本も加国 大衆文化の発生	ワシントン会議にてワシントン体制の成立		関東大震災	
	大正デモクラシー	陸軍軍楽隊が管絃楽を初公開		セノオ音楽出版社設立			高等学校令・大学令 別開の大衆化	急激に音楽会が増加	音楽振興50年記念演奏会 同志社大学発	高田重吉が組合を成立・楽師協会の組織を組織	野村あらえびすが世界初のクラシック音楽のレコード表を行う		
									4608310				
		9572					9040		0.20%			38731	
慶應にピアノクラブが開設		早稲田大学にて、マンドリン合奏が行われる 京都の平安女子音楽学校にてマンドリン科を設置	明治大学マンドリンクラブ創設 京都府立女子音楽学校にてマンドリン科を設置	経理顧問「ゴンドラ洋楽会」を組織 大阪音楽学校にマンドリン・ギター科を設置		東京YMCAマンドリン部 創設 創設部員増加?							
			曲間に移り住み、マンドリン教授に専念 日本音楽協会で流行歌「のちのちの歌」をレコーディング	長女朝子（比留間きぬ子）誕生				東京YMCAマンドリンクラブ設立 編輯に前任 長男 友次誕生		平和記念東京博覧会の審判員を委嘱	9月1日 関東大震災 家と次男を失う		
京都府立第二中学校に転校し、吹奏楽部に入部 陸軍第四師団音楽隊の小島賢八郎に、フランスの音楽基礎教育を受け、ホルンの演奏法や和声学を習得	上京		川島蘭学校に入学 太田黒元と交友を結ぶ 大田監に出入り	太田黒のサロンに通う 池田作「3つの音詩」を披露 基礎理論を学びなおす	3月 雑誌「音楽と文学」の同人となる 演劇批評を掲載	4月 シンフォニアマンダリン・オルケストラ(SMOC)入部 武井と出会う(以下1998 478)	8月 「マンドリンとギター」誌に寄稿 以現役マンドリン奏者として11月に再度上京	8月 音楽を志して「マンドリンとギター」誌に寄稿 以現役マンドリン奏者として11月に再度上京				画家・音楽家の二重生活から音楽に専念する 11月、同志社大学マンドリンクラブの技術顧問となる	
									1月 愛知県立工業学校院 理化学部 高等工業科理科 の助手に就任 初めて買った給料20円で 19円のマンドリンを購入	名古屋マンドリン倶楽部に入会 創設者伊藤 所護士の勧めで公益社 (現ヤマハ) 二期でマン ダリンを教えることに 7~8月 フォードリン・ クラブ東海北陸に演奏額 行 9月 高等工業院期の田中 八郎と出会い、名古屋高等 工業フォードリン・クラブ 創立			1月、第一回全国マンドリン 合奏コンクールを主催 関東大震災により武井文雄 と楽隊が消失 組合を率領ホテルで開く 「オルケストラ・シンフォ ニカ・タライ」と改める
東京外語学校第一学年を終了し、留学のためイタリヤへ渡航 同年所屬により帰朝	同校主催卒業 この頃より自費でギター演奏・和声学を修得		田中家音氏の訪問を受けマンドリン合奏を始め ARMONIA,1954 20)	会名「シンフォニア・マンドリン・オルケストラ」とする 編曲家「マンドリンとギター」発行	宮内省式部 官に任命さ れる	SMOCに管理顧問が入部 同年の演奏会にて瀬戸内 聯合を指揮者に迎える(以下1998 478)				「ギターの夕」を開く 宮内省楽団員を兼任			

1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937
	ロカノ条約 華道憲法成立	独、国際連盟加入 大正天皇崩御	日、金融恐慌	世界恐慌 金輸出解禁		ロンドン会議	漢州事変勃発 西、王政が倒れる	満州国建国 5.15事件	日、国際連盟 脱退 独、ナチズム の樹立と国際 連盟からの脱 退	ソ連、国際 連盟加入	伊、ファシズム 政権が確立し国 際連盟と対立	23歳若井 スペイン内 戦、独・伊 が領土を形 成	盧溝橋事件 日中戦争 独・伊 が領土を形 成
	築地小劇場を小山内薫・土井与志ら が創設 新劇運動の中心に	ラジオ放送の 開始	NHKが設立	ジャズの流行 音楽会・レ コード・パ ンク設立		大学生の数が7 万人を突破		第一回日本 音楽コン クール 児童唱歌コ ンクール (Nコン) 開催		日本が国際現代 音楽協会 (ISCM) 加盟	NHK「国民 歌謡」放送 開始	日中戦争勃 発で活動自 粛 徐々に演奏 会や外国人 演奏家の来 日が減る	
	5060527					5531.506					6071.071		
	0.77%			61502		1.11%			70893		1.17%		
漢口忠左衛門主催によりエストク ディアンティナー・アルモニア・ ディ・センダイが創設	OSTICより本 邦初のマンド リン合奏がラ ジオ放送	アルモニア第一回演奏会											
松原（世田谷区）に移る マンドリン講師もやめ、松原での余 生を楽しむようになる			賢八からの 贈り物 を受けた絹 子、JOAKよ りマンドリ ン合奏を初 披露					絹子、初の リサイタル を開催 精華高等女 学校を卒業 と同時に精 進女子マン ドリンクラ ブを結成、 指揮				4月15日 基根さんの ため死去	
	5月21日、 自作曲をもっ てOSTの指揮 台に立つ OSTの一角に 11月17日、 同志社大の 技術顧問を 兼任し東京へ 移る	OST三代目指揮者となる				帝国音楽学校作 曲科主任教授と なる 「新興作曲家連 盟」発足		OST正会員 を退く(松 原、1998 108) 同志社大に て自作編曲 作を指揮	同志社大に て「部歌」 「行進曲 SMD」を作 曲、初演指 揮を務める	鎌倉に移住 疾井史郎らと楽 団創生を結成 以降作曲から達 ざり演奏活動 を主体とするよ うに			
5月25日 二期指揮「象名マンドリ ン倶楽部」第一回演奏会が開催 門 下生中心 11月29日 二期初めてのリサイタル 「中野二郎マンドリン合奏会」を開 演	1月25日 カラー チェム演奏会 各自治会市広 場にて開催(工 藤2019 23) 7月2日 二期初めてのギターリサイ タル「中野二郎ギターの夕べ」開催 8月30日 二期のマンドリン合奏が 初めて放送される	結婚	12月 二期 指揮「ナゴ ヤ・マンド リンオーケ ストラ」創 立 同日3日 放送に出演	10月28日 第一回演奏会	セゴビア案頓により武井守成と会う(工藤2021 42- 46) この会合以降武井の「マンドリンとギター研究」に答 稿などはしている？(心関係が2,3度記事になって いるのみ)	6月6日 アルモニア5周年 記念第九回演奏会にて沢 田忠左衛門に招かれ、独奏 演奏がJOAK仙台で放送 その後ギター曲 の作曲に精を出すよ うになる						「ギター・ マンドリン 界」誌の発 行開始	7月 二期作 の重編「一 茶さん」が 大ヒット
機関誌を「マンドリン・ギター研 究」と改名 OST第16回演奏会より大沼哲を退 く 発行本「マンドリン・ギター・及其 オーケストラ」刊行 8月、第一回独奏曲コンクールを開催 11月、第二回コンクールを実施 カラーチェム案頓、OST主催演奏会 を開く	カラーチェム案 頓 武井文庫復活 案々開催旨に て瑞典皇太子 同妃同陛下の 御前で演奏 発行本「マン ドリン・ギ ター片影」を 出版	男爵になる			セゴビア案頓、帝国劇場にてリサイタルを開く(依 頼により曲目解説を書く 案頓により中野と会っている (ARMONIA,1954-30) 創立15周年記念演奏会を開く イタリア大使アロイ ジより祝品を贈呈される			住居を中野へ 移す				OST定期演 奏会を中断	

1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953
日中戦争 家総動員法	第二次世界 大戦勃発	日独伊三国軍事 同盟条約調印	日ソ中立条 約締結 独ソ戦争開 始 太平洋戦争 勃発	ミッド ウェー海戦 (戦局の転 機)	学徒出陣	学徒動員の 通年施行	東京大空襲 太平洋戦争終結 国際連合設立		日本国憲法 施行		NATO結成	朝鮮戦争勃発	サンフラン シスコ平和 条約調印 民間放送の 開始・特需 景気		テレビ放送の 開始
洋画輸入禁止		レコード発売 が減少	情報局が音 楽雑誌の統 合を命令		米英楽曲禁止				学校教育法 施行		国立学校設 置法施行				
		6,103,653					5,464,684					7,804,536			
73517		1.20%			104699		1.92%			128013		1.64%			446427
永井荷風と親 交を持つよう になる オペラ「葛飾 情話」を制作		交声曲「北条時 宗」(敵国降伏)を 指揮・放送初演			永井荷風作詞 「冬の窓」を 作曲 しかし 歌詞の内容が 時局の情勢に 合わないとの ことで放送が 中止 作曲にも手が つかなくなる		永井荷風と共に 戦災に合う 終戦以降永井と の親交は途絶え る 作曲活動にも意 欲を無くす			新潟県音楽理 論研究会を開 催 以降指導 を中心とする			ラジオの民 間放送誕生 を機に、放 送音楽の仕 事を主体と する		
		11月18日 皇紀 2600年記念マン ドリン合同第演 奏会 同月26日 第四 回演奏会よりナ ゴヤ・マンドリ ンオーケストラ を「名古屋マン ドリン楽団」と 改称		6月25日 第七回演奏 会にて二郎 作「象徴日 本」を初演	7月11日 戦 時中のため活 動を中断		三重に疎開 4月1日 NHK名 古屋放送管弦楽 団・同放送合唱 団の常任指揮者 に就任(～ 1963) 12月6日 名古屋 マンドリン楽団 練習を開始								
	OST、堀清 隆が指揮に 加わり再開			「ギター の夕」を開く 「マンドリ ン・ギター 研究資料」 と改名し発 行	演奏活動を中 断 「マンドリ ン・ギター研 究資料」廃刊			式部頭に補 せらる	木官を免ぜ らる			OST復興第 一回演奏会 を開催 12月14 日 死去			

1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971
ブルジョア条約 機構成立 高度経済成長期 突入										東海道新幹 線開通・東 京五輪開催				文化庁設置			
								国立総合大学廃止									
	8,475,954					8,390,982					9,127,519					10,727,636	
	5.27%		578060			6.89%			794100		8.70%			1270189		11.84%	1468528
									J.S.パッハ 「ベッサカリ ア」を関西マ ンドリン合奏 団のためにブ レクナム合 奏に編曲(松 下,1998 496)								9月、作曲 家1、ド ムレットの1 開店記念 演奏会の 関西マ ンドリン合 奏団と共に イタリアへ (松下,1998 498)
4月より月一度 「歌の花籠」と いう放送番組を 持つ			子供を対象 とした番組 「あくらべ あくらべ」 開始(～ 1963)			5月22日 第19回 演奏会 この回 より中野二郎は 楽団を退く		選挙「FRETS -18, 1962.4.20」誌が全183 ページにわたる「中野二郎特集号」を発行 4月22日 中野二郎選挙祝賀演奏会(岐阜) 5月20日 中野二郎選挙記念演奏会(名古屋) 12月3日 中野二郎選挙記念演奏会(東京)	2月ごろ NHK名古屋放 送管弦楽団指 揮者を辞任 同月19日 同 志社大学マン ドリンクラブ の技術顧問に 就任				4月14日 第一回全日本マンドリ ン演奏コンクール開催(岐阜) 5月 コンクールの中部地区出場 者の結果を受け中部マンドリン 音楽研究会設立 11月13日 「マンドリン演奏の タベ」開催				10月13日 ブ レットロ・ロ マンティコ第 一回マンドリ ン演奏会(主 婦中部マンド リン音楽研究 会)
			OST解散														